

二少女

国木田独歩

青空文庫

上

夏ちまたの初、月色街ちまたに満つる夜の十時ごろ、カラコロと鼻緒のゆる
 そうな吾妻あずま下駄げだの音高く、芝しば琴平社こんびらしゃの後のお濠ぼたばたを十八はば
 かりの少女むすめ、赤坂あかさかの方から物案ものあんじそうに首くびをうなだれて来る。
 薄闇うすぐらい狭いぬけろじの車くるま止どめの横木くわぎを俛むくつて、彼方むこうへ出ると、
 琴平社の中門なかつかどの通りである。道幅二間にまばかりの寂しい町で、（産
 婆まど）と書いた軒燈がすが二階造にかいぞうの家の前まえに点つている計はかりりで、暗夜やみよなら
 真闇まつくら黒な筋である。それも月の十日と二十日は琴平の縁日えんじつで、中
 門なかつかどを出で入はいりする人の多少すこしは通するが、実まじ、平常ふだん、此町このまちに用事ようじのある

者でなければ余り人の往来ゆきぎしない所である。

少女むすめはぬけるじを出るや、そつと左右を見た。月は中天かいつに懸て

いて、南から北へと通つた此町を隈なく照らして、森しんとしている。

人の住んで居ない町かと思われる程で、少女が（産婆）の軒燈の

前まで来た時、其二階で赤あかんぼ児の泣声が微かにした。少女は頭を

上げてちよつと見上げたが、其儘すぐ一軒置おいた隣家となりの二階に目を

注いだ。

隣家の二階というのは、見た処、極く軒の低い家で、下の屋根

と上の屋根との間に、一間の中ちゆうまど窓が窮屈はぎそうに挟まっている、

其窓先に軒がさも鬱陶しく垂れて、陰気な影を窓の障子に映じて

いる。

少女は此二階家の前に来ると暫時しばらく佇たちどま止とつて居たが、窓を見上げて「江藤えとうさん」と小声で呼んだ、窓は少し開あいて、薄赤い光が煤すすに黄きんだ障子きばに映じている。

「江藤さん、」と返事が無いから、少女は今一度、やはり小声で呼んだ。

障子がすつと開いたかと思うと、年若い姿が腰から上を現わして、

「誰どなた？」

「私わたし。」

「オヤ、田川たがわさん。」

「少し用事が有あて来たのよ、最早もうお寝やすみ？」

「オヤそう、お上がんなきいよ、でも未だ十時が打たないでしよう。」

「おそ晩く来てお気の毒様ねエ」と少女は少しもじもじして居る。

二階の女の姿が消えると間もなく、下の雨戸を開ける音がゴトゴトして、たてつけ建付のゆが曲んだ戸がやつ漸と開いた。

「オヤ好い月だね、田川さんお上がんなきいよ」という女は今年十九、歳には少し老けて見ゆる方なるがすらりとした姿の、気高い顔つき、髪は束髪に結んで身にはあらいざらし洗曝の浴衣を着けて居る。

「ちよつと平ひらおか岡さんに頼まれて来た用があるのよ、此処でも話せますよ、もう遅いもの、上ると長座ながくなるから。……」と今来た少女は言つて、笑ふくを含んで居る。それで相手あいての顔は見ないで、月

を仰だ目元は其丸顔に適好しく、品の好い愛嬌のある小軀の女である。

「用というのは大概解つて居ますが、色々話もあるから一寸お上んなさいよ。」

「そう、あの局の帰りに来ると宜んだけど、家に急ぐ用が有つたもんだから……」

といい乍ら二人は中に入つた。

入ると直ぐ下駄直しの仕事場で、脇の方に狭い階段が付いて、仕事場と奥とは障子で仕切である。其障子が一枚開かつていたが薄闇くつて能く内が見えない。

「遅く来つて御気毒様、」と来た少女は軽く言つた、奥に向つて。

「どう致しまして、」と奥でしわがれ噎た声がして、つゞい続けて咳嗽せきがして、火鉢の縁をたたく煙管きせるの音が重く響いた。

「この乱暮さを御覧なさい、座る所もないのよ。」と主人あるじの少女はみしみしと音のする、急な階段を先に立たって陞のぼって、

「何卒どうぞ此処へでも御座おすわんなさいな。」

と其処らの物を片付けにかかる。

「すこし頼まれた仕事を急いでいますからね、……源ちゃんげん、お床を少し寄せますよ。」

「いいのよ、其様そうしてお置きなさいよ、源ちゃん最早もうお寝み、」と客の少女は床なる九歳ここのつばかりの少年を見て座わり乍ら言つて、其のにこやかな顔に笑味を湛えた。

「姉さん、氷！」と少年は額を少し挙げて泣声で言った。

「お前、そう氷を食べて好いかね。二三日前から熱が出て困って居るんですよ。源ちゃんそら氷。」

主人の少女は小さな箱から氷の片かけを二ツ三ツ、皿に乗せて出して、少年の枕まくらもと頭におい置いて、「もう此限これぎりですよ、また明日あした買ってあげましょうね工」

「風邪でもおひきなさったの！」と客なる少女は心配そうに言った。

「もう快い々々ですよ。熱いこと、少し開けましょね工」と主人の少女は窓の障子を一枚開け放した。今まで蒸熱むせつかつた此一室ひとまへ冷たい夜風よかぜが、音もなく吹き込むと「夜風に当ると悪いでしょうよ、

わたし
私は宜いからお閉めなさいよ、」と客なる少女、少年の病気を気にする。

「何に、少しは風を通さないと善くないのよ。御用というのは欠勤届のことでしょう、」と主人の少女は額から頬へ垂れかかる髪をうるさそうに撫であげながら少し体軀からだを前に屈かがめて小声で言った。

「ハア、あの五週間の欠勤届の期限が最早きれたから何とか為さらないと善いけないツて、平岡さんが、是非今日私に貴姉あなたのことを聞いて呉れろツて、……明朝あしたは私が午前出だもんだから……」

「成程そうですねエ、真実ほんとに私は困まツちまツたねエ、五週間！
もう其様そんなになつたらうか、」と主人の少女は嘆息ためいきをして、

「それで平岡さんが何とか言つて？」

「イイエ別に何ともお仰らないけエど、江藤さんは最早局を止すのだらうかつて。貴姉どうなさるの。」

「ソー、夫れで実は私も迷つて居るのよ」と主人の少女は嘆息をついた。

客の少女は密と室内を見廻した。そして何か思い当ることでも有るらしく今まで少し心配そうな顔が急に爽々して満面の笑味を隠し得なかつたか、ちよツとあらたまつて、

「実は少々貴姉に聞て見ることがあるのよ、」
と一段小声で言つた。

「何に？」と主人の少女も笑いながら小声で言つた。これも何か

思い当る処あるらしく、客なる少女の顔をじつと見て、又た密と傍の寢床を見ると、少年は両腕を捲り出したまま能く眠っている、其手を静に臥被ふとんの内に入れてやった。

「怒おこつちや善いけないことよ」と客の少女はきまり悪るそうに笑つて言出し兼ねている。

「凡そ知ツているのよ、言いて御覽なさい、怒りも何なにもしないから。お可笑かな位よ、」と言う主人の少女の顔は羞は恥ずそうかしうな笑のうちにも何となく不穩のところが見透かされた。

「私の口から言い悪くいけれど……貴姉大概解かっていますよ……」

「私が妾になるとか成ったとかいいう事なんでしょう。」

と言つた主人の少女の声は震えて居た。

下

此二人の少女は共にとうきようでんわこうくわんきよく東京電話交換局の交換手であつて、主人の少女は江藤えとうお秀ひでという、客の少女は田川たがわお富とみといい、交換手としてはふたり兩人とも老練の方であるがお秀は局を勤めるようになった以来、未だ二年許りであるから給料は漸と十五錢であつた。

お秀の父はとうきようふ東京府に勤めて三十五円ばかり取つて居て夫婦の間にお秀を長女かしらとしてお梅源うめげんざぶろう三郎の三人の児もつを持って、左まで不自由なく暮らしていた。夫れでお秀も高等小学校を卒えることが

出来、其後は宅うちに居て針仕事の稽古のみに力を尽す傍かたわら、読書をも
勉めていたが恰度三年前、母が病やみついて三月目に亡くなつて、夫
れを嘆く間もなく又た父が病床とこに就くように成りこれも二月ばか
りで母の後を逐い、三人の児は半歳のうちに両ふたおや親を失つて忽ち
孤みなしご児となつた。そうして殆ど丸裸体の様で此世に残された。

そこで一人の祖母は懇意な家で引うけることになり、お秀は幸
い交換局の交換手を募つて居たから直ぐ局つとに勉めるようになって、
妹と弟は兎も角お秀と一所に暮すこししていた。それも多少は祖母を引
うけた家から扶みづい助でもらつて僅かに糊口くらしを立てていたので、お秀
の給料と針仕事とでは三人の口はとても過すぐ活されなかつた。しか
しお秀の勞ほねおり働は決して世の常の少女の出来る業ではなかつた。

あちら此方と安値やすそうな間を借りては其処から局に通つて、午前
 出の時は午後を針仕事に、午後出の時は午前を針仕事に、少しも
 安息やすむ暇がないうちにも弟を小学校に出し妹に自分で裁縫の稽古
 をしてやり、夜は弟の復習さらえも験みてやらねばならず、炊事にたきから洗濯
 から皆な自分一人の手でやっていた。

其うち物価ものは次だん第だ高くなり、お秀三人の暮くらは益々困難に成
 つて来た。如何どうするだろうと内ない々局の朋輩も噂うわしていた程であ
 ったが、お秀は顔にも出さず、何時も身の周囲まわり小清潔こぎつぱりとして左
 まで見悪い衣装みにくなりもせず、平気で局に通っていたから、奇怪おかしなこと
 のように朋輩は思つて中には今の世間に能くある例ひいを引ひて善くな
 い噂を立てる連中もあつた。

すると一月半ばかり前からお秀は全然局に出なくなつた。初
は一週間の病氣届、これは正規で別に診断書が要らない、其次は
診断書が付て五週間の欠勤。其内五週間も経た、お秀は出て来な
いのみならず、欠勤届すら出さない。いよいよ江藤さんは妾にな
つたという噂が誰の口からともなく起つて、朋輩の者皆んな喧
騒く騒ぎ立てた、遂に係の技手の耳に入つた。そこで技手の平
岡は田川お富に頼んで、お秀の現状を見届けた上、局を退く
とも退かぬとも何とか決めて呉れると伝言さしたのである。お富
は朋輩の中でもお秀とは能く気の合て親密しい方であるからで。
しかしお秀が局を欠勤でから後も二三度会つて多少事情を知つ
て居る故、かの怪しい噂は信じなかつたが、此頃になつて、或と

いう疑が起らなくもなかつた。というのもお秀の祖母という人が余り心得の善い人でないことを兼ねて知っているからで。

お富はお秀の様子を一目見て、もう殆ど怪しい疑うたがい惑は晴れたが、更らに其室のうちの有様を見てすっかり解かつた。

お秀の如何に困つて居るかは室のうちの様子で能く解る。兼ねて此部屋には戸棚というものが無いからお秀は其衣類を柳行李ふ二個たつに納めて室の片隅へやに置いていたのが今は一個ひとつも見えない、そして身には浴衣の洗曝を着たままで、別に着更えもない様な様である。六畳の座敷の一畳は階子段に取りられて居るから実は五畳敷の一室に、戸棚がない位だから、床もなければ小さな棚一つもない。

天井は低く畳は黒く、窓は西に一間の中窓がある計り東のは真ほ

実んとの呼吸いきぬかしという丈だけで、室むろのうち何処どことなく陰鬱いんうつで不潔けつで、とても人の住すむべき処ところでない。

簿記函かと書かいた長方形の箱はこが鼠ねずみ入いらずの代しろをしている、其上そのうへに二合入ふたごの醬油しょうゆ徳利とくりと石油せうゆの罐かんとが置おいてあつて、箱はこの前まへには小さな塗膳ぬすがあつて其上そのうへに茶碗ちawan小皿せうべんなどが三ツ四ツ伏ふせて有ある其横そのよこに煤すすぼつた涼しやう炉ろが有あつて凸でこ凹ぼこした湯や罐かんがかけあつてある。涼炉しやうろと膳ぜんとの蔭かげに土鍋つちかが置あいて有あつて共に飯いヒひが添そえて有あるのを見れば其処そのところらに飯桶いはちの見えぬのも道理ことわりである。

又た室むろの片隅かたぐしに風呂敷包ふろしきが有あつて其傍そのそばに源三郎げんざうの学校道具がくやうが置あいてある。お秀ひでの室むろの道具たがひは実にこれ限だけである。これだけがお秀ひでの財産ざいぜんである。其外源三郎げんざうの臥ふして居ゐる布団ふだんというのを見ても居ゐるの

も気の毒なほどの物で、これに姉と弟とが寝るのである。この有様でもお秀は妾になつたのだらうか、女の節操みさおを売うつてまで金銭が欲ほしい者が如何して如此こんな貧乏まずしい有様だらうか。

「江藤さん、私は決して其様そんなことは眞実ほんにしないのよ。しかし皆なが色々いろんなことを言っていますから或もしやと思つたの。怒つちや宜いくないことよ、」とお富の声も震えて左も気の毒そうに言つた。

「否い工、怒るところか、貴姉あなた宜く来て下すつて眞実ほんに嬉れしう御座います、局の人が色々なことを言っているのは薄々知っていました、私は無理はないと思ひますわ……」と、

さも悲しげにお秀は言つて、ほつと嘆息を吐いた。

「何故なぜ。私は口惜くやしいことよ、よく解りもしないことを左も見て来

たように言いふらしてさ。」

「私だつて口惜いと思わないことはないけど、あんな人達が彼
是れ言うのも尤ですよ、貴姉……祖母おばあさんね……」

とお秀は口籠くちごもつた、そしてじつとお富の顔を見た目は湿んでい
た。

「祖母さんが何とか言つたのでしよう……ほんと真実に貴姉はお可哀そ
うだよ……」とお富の眼も涙含んだ。

「祖母さんのことだから他の人には言えないけれど……そら先達
貴姉の来ていらしやつた時、祖母さんがあんな妙なことを言つた
でしょう。処が十日ばかり前に小石川こいしがわから来て私に妾になれと
言わないばかりなのよ、あのお前の思案かんがえ一つでお梅や源ちゃん

にも衣服きものが着せてやられて、甘味おいしいものが食べさせられるツて……」
 「それで妾めかけになれって？」お富おとみは眼眶まぶちを袖で摩こつて丸い眼を大きくして言いつた。

「否い工妾いになれって明はつきり白しろとは言わないけれど、妾めかけ々々世間よこで大変悪く言いうが芸者うらなんかと比較くらべると幾いく何なんいいか知しれない、一人の男を旦那だんなにするのだからって……まあ何なにという言い葉はでしよう……私わたしは口惜くちやくくつて堪たりませんでしたの。矢張やじやう身を売うるのは同じことだと言いいますとね、祖母そぼろさんや同きょうだい胞ぼのためために身を売うるのが何が悪わるいツて……」

「まあ其その様やまなことを！」

「実じつ、私わたしも困こまり切きつているに違ちがいないけエど、いくら零おち落ふても妾めかけ

になぞ成る気はありませんよ私には。そんな浅間しいことが何で出来ましようか。祖母さんに、どんな事が有つても其様な真似は私はしない、私のやれる丈けやって妹と弟の行末を見届けるから心配して下さるなど言切つて其時あんまり口惜かつたから泣きましたのよ。それからね寧いっそのこと針仕事の方が宜いかと思つて暫しばらく時局を欠勤やすんでやって見たのですよ。しかし此頃いまに成つて見ると矢張仕事ばかりじゃア、有る時や無い時が有つて結極つまりが左程の事もないようだし、それに家にばかりいるとツイ妹や弟の世話が余計焼きたくなつて思わず其方それに時間を取られるし……ですから矢張半日ずつ、局に出ることに仕ようかとも思つて居たところな
「
んですよ。」

「そしてお梅さんはどうなすつて？」とお富は不審ふしぎそうに尋ねた。

「ですから、今の処、とても私一人の腕で三人はやりきれない！

小石川の方へも左迄は請求たのまれないもんですから、お梅だけは奉公に出すことにして、丁度一昨さきおととい々日か先方むこうへ行きましたの。」

「まあ何処へなの？」

「じき其処ひかげちようなの、日蔭町の古着屋なの。」

「おさんどんですか。」

「ハア。」

「まあ可哀そうに、やつと十五でしょう？」

「私も可哀そうでならなかつたけエど、つまり私の傍に居た処が苦しいばかりだし、又た結局つまりあの人も暫時しばらくは辛い目に遇あつて生育そだつ

のですから今時分から他人の間に出るのも宜かろうと思つて、心を鬼にして出してやりました、辛抱が出来ればいいがと思つて、……それ源ちゃんこんなは斯様だし、今も彼の裁縫しごとしながら色々いろんなことを思うと悲しくなつて泣きたくなつ成て来たから、口のうちに唱歌を歌つてまぎらしたところなの。」

「そして貴姉、矢張局にお出いでなさいな。その方が宜いでしようよ。それに局に出て多いそがし忙しい間だけでも苦勞を忘れますよ」とお富は真面目にすすめた。お秀は嘆息ついて、そして淋びしそうな笑を顔に浮かべ、

「ほんに左様そとうですよ、人様のお話の取次をして何番々々と言つて居るうちに日が立ちますからねエ」と言つて「おほほほほ」と軽

く笑う。「女の仕事はどうせ其様なものですわ、」とお富も「おほほほほ」と笑った。そしてお秀は何とも云い難い、嬉しいような、哀れなような、頼もしいような心持がした。

兎も角も明後日あさってからお秀は局に出ることに話を極めてお富に約束したものの、忽ち衣類きものの事に思い当って当惑した。若い女ばかり集まる処だからお秀の性質でもまさかに寝衣ねまき同様の衣服きものは着てゆかれず、二三枚の単物は皆な質物しちと成っているし、これには殆ど当惑したお富は流石女同志だけ初めから気が付いていた。お秀の当惑の色を見て、

「気に障さえちやいけないことよ、あの……」

「何に、どうにか致しますよ」とお秀は少し顔を赤らめて、「お

ほほほほ」と笑った。

「だつてお困りでしよう？ 明日私が局から帰つたら母上さんと

相談して……四時頃又来ましようよ。」

「あんまりお氣の毒さまで……」

お秀は眼に涙一杯含ませて首を垂れた。お富は何とも言い難い、悲しいような、懐かしいような心持がした。

夜が大分更けたようだからお富は暇を告げて立ちかけた時、鈴虫の鳴く音が突然室のへやのうちでした。

「オヤ鈴虫が」とお富は言つて見廻わした。

「窓のところにお梅さんが先達て琴平で買つて来たのよ、奉公に出る時持てゆきたいって……。」

「まだ小供ですもの、ねえ」とお富は立て二人は暗い階段を危なそうに下り、お秀も一所に戸外へ出た。月は稍や西に傾いた。夜は森と更けて居る。

「そこまで送りましょう。」

「宜いよ、其処へ出ると未だ人通りが沢山あるから」とお富は笑つて、

「左様なら、源ちゃんお大事に、」と去きかける。

「御壕の処まで送りましょうよ、」とお秀は関わず同伴に来る。二人の少女の影は、薄暗いぬけろじの中に消えた。

ぬけろじの中程が恰度、麵包屋の裏になつていて、今二人が通りかけると、戸が少し開て居て、内で麵包を製造っている処が能

く見える。其^{やき}焼たての香^{こう}ばい^{におい}香^{そと}が戸外までぶんぶんする。其^{やき}焼く手際が見ていて面白いほどの上手である。二人は一寸^{ちよ}と立^{たつ}てみていた、

「お美味^いし^しそうねエ」とお富は笑つて言った。

「明朝のを今製造^{こしら}えるのでしようねエ」とお秀も笑うて行こうとする、

「ちよつと御待ちなさいよ」とお富は止めて、戸外^{そと}から、

「その麵包を少し下さいな。」

三十計りの男と十五位な娘とが頻に焼^{やい}ていたが、驚^{おどろ}いて戸外^{そと}の方を向いた。

「お幾^{いく}価^{くら}？」

娘は不精無精に立つた。

「お気の毒さま、これ丈け下さいな、」とお富は白銅一個ひとつを娘に渡すと、娘は麵包を古新聞に包んで戸の間から出した。

「源ちゃんにあげて下さいな、今夜焼きたてが食べさせたいことねエ、そら熱いですよ。」とお秀に渡す。

「まあお気の毒さまねエ、明朝あすのお目覚めざにやりましょう。」

二人はお壕ぼた辺の広い通りに出た。夜が更けてもまだ十二時前であるから彼方あちら此方こちら、人のゆききがある。月はさやかに照てりて、お壕の水の上は霞んでいる。

「左様なら、又た明日あした。お寝みなさい、源ちゃん御大事に。」お富はしとやかに辞儀して去ゆこうとした。

「どうも色々有難う御座いました。お母上にも宜しく……それで
は明日。」

二人は分れんとして暫時、立止つた。

「あア、明日お出になる時、お花を少し持て来て下さいませんか、
何んでも宜いの。仏様にあげたいから」

とお秀は云い悪くそうに言つた。

「此頃は江戸菊が大変よく咲ているのよ、江戸菊を持て来ましょ
うねエ。」とお富は首をちよつと傾げてニコリと笑つて。

「貴姉の処に鈴虫が居て？」

「否エ、どうして？」

「梅ちゃんの鈴虫が此頃大変鳴かないようになって、何だか死に

そうですから、どうしたら宜いかと思つて。」

「そう、胡瓜をやつて？」

「ハア、それで死にそうなのよ」

と言つてる処へ、巡査が通り掛つて二人の様子を怪しそうに見て去つた。二人は驚いて、

「左様なら……」

「左様なら……急いでお帰んなさいよ……。」

お富はカラコロカラコロと赤坂の方へ歸つてゆく、お秀はじつと其後影を見送^{みおくつ}て立^{たつ}て居た。(完)

(発表年月不詳「濤声」より)

青空文庫情報

底本：「日本プロレタリア文学大系 序」三一書房

1955（昭和30）年3月31日第1版発行

1961（昭和36）年6月20日第2刷発行

※底本に見る旧仮名の新仮名への直し漏れは、あらためた上で注記した。

入力：Nana ohbe

校正：林 幸雄

2001年12月27日公開

2004年7月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二少女

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>